

# 第66回日本酪農研究会 北海道札幌市にて開催

営業統括室 小坂 康

11月11～13日において、日本酪農青年研究連盟（委員長 山本 隆）主催の第66回日本酪農研究会が、農林水産省をはじめとする51関係団体の後援・協賛・広告のもと、北海道札幌市にて、400余名もの酪農家や関係団体の方々が全国から集い盛大に開催されました。

本研究会の開催目的は、日頃の研究成果と実践活動の発表に併せ、分析検討・知識技術の交流を通し、山積する諸問題の解決を図りながら、国際競争に勝ち残るわが国酪農産業の未来を切り拓き、発展に寄与することにあります。

主催者の山本隆委員長は、3年ぶりの札幌の地での開催に際し、「酪農家戸数が減少し生乳生産量が低下しているこの時代にこそ、高い理念と困難を切り開く気概を持つ盟友同士が切磋琢磨し、希望ある未来を切り開いてきた酪青研が真価を発揮する時ではないか！」と挨拶されました。



開会式：山本委員長の開会挨拶

雪印メグミルクグループを代表して中野代表取締役社長の挨拶で、「酪農生産を維持・発展させていくため、全国の酪青研ネットワークを通じ、酪農技術や経営の向上にリーダーシップを発揮されたい。日本人の健康と食生活を支えている牛乳乳製品の安定的な供給に向け、これからも強く連携していきましょう。」と全国の酪農家に訴えました。

研究会では、全国から選抜された酪農家6名による酪農経営発表と8名の意見・事例発表が行われました。

酪農経営発表の中から「大地はわがもの」と題して発表された北海道協議会南部十勝地方連盟の加藤太郎氏が最優秀賞（黒澤賞）・農林水産大臣賞を受賞されました。同氏は自給飼料生産に重きを置いた取り組みとして、土地の交換・集約化による作業の効率化と草地植生を改善する為に経年草地をデントコーンに転換し、2～3年作付け後に草地更新する輪作体系の導入、農地の規模と発生する糞尿のバランスを考慮して農地に還元できる頭数規模を意識した経営の拡大、地域との絆を大切に、新規就農を希望する方々への協力と親睦を深める活動の実践などが高く評価されました。今回の発表事例では、地域に応じた資源循環システム



来賓挨拶する中野社長と連盟役員・ご来賓の方々



黒澤賞を受賞した加藤さんの経営発表

による自給飼料生産とそれによる強固な生産基盤の形成が共通する特徴でした。また、それぞれの経営管理の改善の取組みが際立っていたのも印象的でした。

意見・事例発表では、各々の経営に加えて、地元地域（組織）とのつながりを紹介するものが多

くありました。設立50年を迎えた単位研究会のあゆみ、TMRセンターの取り組み、新規就農の報告など、みなさんが酪農に思いを乗せて地域を大切に思う気持ちが感じられるものでした。

また、発表会後に行われた特別プログラム「担い手問題」に関する講演会では、「未来へ思いをつなげるために」と題した学校法人酪農学園とわの森三愛高等学校アグリクリエイティブ科機農コースの生徒の皆さんの酪農への率直・真摯な想いに、会場は爽やかな雰囲気にも包まれ、ベテラン参加者との現実的な質疑の中にも明るい兆しが感じられました。



黒澤賞杯を手に喜びの加藤さん



別海町酪農研修牧場の谷野専務

本大会は、厳しい現下の情勢での酪農経営のあり方を発表事例に学ぶと共に、全国の参加者との貴重な情報交換の機会として大変有意義な大会となりました。次回大会においては関係する皆様の一層のご参加を期待申し上げます。尚、詳しいお問合せや酪青研への加入のご希望は、最寄りの弊社各営業所までお寄せください。



発表会：発表者の熱弁に聴き入る満場の参加者



とわの森三愛高校生徒さん

続いての「酪農家を育てる！～別海町酪農研修牧場の取組み」と題した（有）別海町酪農研修牧場 取締役専務 谷野利一氏は、酪農主産地たる別海町における酪農研修牧場の概要や活動の紹介と共に、地域の酪農の担い手育成に向けた様々な条件や課題を具体的に説明され、今後の各地での取組みに大いに参考となるものでした。



会場ロビーの雪印種苗展示ブース